

## 論文審査の要旨及び担当者

### 論文題名

心理臨床におけるセラピストの身体を通した共感  
—ダンス/ムーブメントとフェルトセンスの活用—

### 論文審査の要旨

本研究は心理臨床におけるセラピストの「身体を通した共感」について、特にダンス/ムーブメントと「身体で感じられる意味感覚」であるフェルトセンス（Gendlin, 1981/1982）の活用に焦点を当てて論じたものである。論文は全V部、14章で構成されている。第I部（第1章から第4章）が序論、第II部（第5章から第7章）が方法論、第III部（第8・9章）と第IV部（第10章から第12章）が本論であり、5つの事例研究が行われており、第V部（第13・14章）が結論となっている。

第I部第1章「はじめに」では著者自身の心理臨床実践および教育の経験の中で醸成された、臨床心理学における身体の軽視という問題意識に基づいて、心理療法において最も重要な現象である「共感」の身体的次元に着目することの必要性が提示される。続く第2章「臨床心理学における身体的アプローチと身体観」では代表的な身体的アプローチのレビューが行われ、心身一元から二元まで、自他一元から二元までを視野に入れた実践の必要性が示される。第3章「心理療法における『共感』と『身体』」ではまず心理療法における共感概念が整理され、それが本来的に身体に根ざしたものであることが確認された上で、パーソン・センタード・アプローチにおける Gendlin のフォーカシングを中心としたセラピストの身体と共感についての理論、およびダンスセラピーにおける運動感覚を重視した「身体的共感」に関する諸理論が検討される。以上をふまえて、本研究独自の「身体を通した共感」概念が提示される。本論文において「身体を通す」とは、相手の/自分の「身になること」、そして相手の/自分の「身から離れること」、の両方を含む内的行為であり、「身体を通した共感」とは、「セラピストがクライアントの身体的表出をできる限り受けとめて感じとり、それを理解しようという内的努力とみずからの身体の動きによって、感覚的共感・情動的共感・認知的共感が生じ、それが身体的・言語的表出によってクライアントに伝えられる循環的なプロセス」であるとする。さらに本研究における検討の枠組みとして、セラピストおよびクライアントの身体を通した共感のプロセスのモデルが提示される。第4章「本論文の目的」では、本論文を貫くリサーチ・クエスションとして、以下の3つが提示される。1「セラピストの身体をどのように使えば、クライアントへの共感を身体を通して深めることができるか」、2「身体を通した共感が生じるときに、

セラピストとクライアントはどのような体験をするのか」、3「身体を通した共感を言語化し伝達するために、どのような方法を用いることができるか」である。

第Ⅱ部における研究の方法論（第5章）では、山本力による「事例の人称」概念を発展させた一人称・二人称・三人称の事例研究という枠組みを提示した。そこでは事例研究の基本である二人称の事例研究を、研究者自身と研究対象者双方の一人称的視点と三人称的視点の間を往還して、二者の内的体験とその相互作用を探求するものとして位置づける。さらに、「身体を通した共感」研究のために「研究者の身体」を活用することの有効性を主張し、芸術療法領域等で発展しつつあるアートベース・リサーチを参考として、研究者のフェルトセンスとムーブメントを用いた「身体を通した分析」というデータ分析法を提示している。

続く実践の方法論（第6・7章）では、第6章で本論文の臨床事例（第Ⅲ・Ⅳ部）で用いられる「型のあるダンス」としての盆踊りとフラの特性に基づいた活用について検討し、これらの踊りを心理臨床実践で用いる際にセラピストがクライアントの安全感を重視し、共に踊りながらグループの一体感と同時に個々の内的体験の差異を尊重する姿勢が重要であることを論じている。第7章ではダンス／ムーブメントとフォーカシングを組み合わせた実践のレビューから、本研究においてフォーカシングを活用する方針が提示される。それはセラピストが自他へのフォーカシング的態度を保ち、ダンス／ムーブメントを通じて感じられた自身のフェルトセンスを深め、さらにセラピスト＝研究者としてデータ分析に活用する、という本研究におけるフォーカシング活用の特徴を示したものである。

第Ⅲ部はフラを軸とした子育て支援活動である「親子フラ教室」の事例研究である。第8章は二人称の事例研究として、3年間の乳幼児の母親へのグループ支援を描いている。開始当初子育てにも踊ることにも強迫的だった母親たちが、フラを通してリラクゼーションと自己表現の模索を体験し、子ども－母親間、母親－セラピスト間の無意識的共鳴という同一化した状態から、個と個として分化していった過程が描き出される。第9章はクライアント・インタビューを用いた三人称の事例研究として、ある医療福祉施設でフラを披露するパフォーマンス体験において生じた観客との身体的な相互交流について、ダンサーとして参加した4人の母親へのインタビューが行われた。観客との「見る・みられる体験」の分析の結果、小さな危機的事態を繰り返し乗り越えることを通して安全感が強まり、セラピストや他のメンバーとの同一化が起り、さらに分化が生じて、共感が深まるプロセスが明らかにされた。

以上2つの事例研究を通して、言語的データの分析により臨床実践における相互交流やセラピストの自己探索の一部を描き出すことができたが、クライアントの身体的体験を詳細に検討するには至らなかったため、第Ⅳ部では実践方法および研究方法の拡大へと研究を進めた。第10章は一人称の事例研究である。フォーカシングをベースとした研究法であるTAEステップを用いて、9か月間のダンスセラピーのトレーニングにおけるトレーニー＝研究者の自己探求のプロセスを理論化し、セラピストの自己探索プロセスの詳細と研究者のフェルトセンスを活用することの有効性を示した。第11章ではそれを発展させ、「身体を通した分析の試み」としてセラピスト＝研究者のフェルトセンスとムーブメントを用いた分析を行った。親子フラ教室における一組の親子への4年間の個別支援をもとにセラピストによる経過の振り返り、母親へのクライアント・インタビュー、さらに「身体を通した分析」という段階的・多元的な分析を

行った結果、親子フラ教室での体験が母親にとって「抱っこ」の多重構造になっており、その体験を通して母親と子どもが自然な分化を果たしていったことがセラピスト＝研究者に体感として理解された。そこでこの「身体を通した分析」をさらに発展させるべく、第12章では言語的交流のみでは共感の手ごたえを得にくい認知症高齢者グループでの1年8か月のダンスセラピー実践における身体を通した共感について、フェルトセンスとムーブメントを用いた分析を行った。その結果、セッションの中で盆踊りが蘇った場面における認知症高齢者の身体的記憶の想起と、セラピストの身体を通した共感をもたらす創造的即興のプロセスが示され、強い同一化と個々の内側に戻っていく分化の両方を支えるセラピストの役割が明らかとなった。

第V部第13章「総合考察」では、これまでの分析を踏まえて、3つのリサーチ・クエスションへの回答が導きだされた。リサーチ・クエスション1については、本論文の実践の指針とした①ダンス／ムーブメントの活用、②フェルトセンスの活用に、特定の技法を用いる前提としての③クライアントの「安全」を守ること、という3つの次元でセラピストの身体の使い方の要点が整理された。

リサーチ・クエスション2については、まず身体を通した共感におけるセラピストとクライアントそれぞれの体験の中での同一化と分化が描き出され、さらに、セラピストが身体を通した共感を試みる際に「2つの体験の重なり」が生じることが見いだされた。それらはa.「する体験」と「される体験」が重なり反転する、b.現在の身体的体験が過去の身体的体験と相似する、c.セラピストとクライアントの自己探索が部分的に一致する、d.自分を感じる体験と相手を理解する体験が重なる、である。セラピストによるクライアントへの同一化には、能動と受動を超えた関係性の取り入れとセラピスト自身の身体的記憶の想起が伴い、それがセラピストの自己の分化とクライアントへの認知的理解へとつながり、それらを表現し伝達することを通して、クライアントとの分化が進んでいくことが考察された。共感が身体を通して深められるととらえることによって、同一化だけでなく分化という側面に注目すること、セラピストにも同一化と分化が深い次元で生じると理解することの重要性が明らかになった。

リサーチ・クエスション3については、研究者の身体を通した分析として、研究者のフェルトセンスを使ってデータを身体的に感じ、さらにそれを言語あるいはムーブメントで表現することを繰り返す方法を提示した。身体を通した共感を軸とする実践を身体を通した方法で分析するということは、セラピスト＝研究者の一人称・二人称の体験としての「身になること」と「身から離れること」を再度深く体験し直し、三人称の言葉を使って伝達を試みるということであり、その研究方法の意義が示された。

本研究は「心理臨床実践はセラピストの身体を通したものである」「共感は本来的に身体に根ざしている。そして身体を通したものとして深めていくことができる」という著者の強い問題意識のもと行われた。著者は理論的概念を整理した上で、セラピストの身体の中の特に身体感覚と身体運動に着目して活用することにより、心理臨床の最も重要な現象である共感をさらに「身体を通した共感」として深めることができる方向性とその具体的な方法を提示した。それは著者みずからのフェルトセンスを用いて相手を身体的に感じ、ムーブメントで表現することを繰り返すことを通して行われる統合的なアプローチである。従来の共感理論に不足していたセラピストの身体の活用という視点を導入することにより、身体を通した共感へのアクセ

スを可能にしたところに本論文の最大の功績がある。あわせて著者はセラピスト側の体験やクライアント側の体験、双方の体験の重なりやその分化等を分析しつつ、その過程を豊富な図式を駆使しながら、これまで殆ど手つかずであったこの領域を精緻に言語化してゆく。動きのあるグループセッションを言葉にきちんと直し、それを身体を通した共感という軸で描き上げた点は見事である。グループ事例から個別事例、自己研究の事例分析など、複数の事例研究のアプローチを用いた多層的・重層的な研究となっている点も評価できる。日常生活のなかから身体を疎外する傾向が顕著な現代において身体を中心にすえ、互いの身体が感じ受けとるものに光をあて、その意義を明らかにしつつそこにせまる方法を明らかにした点、現代人の精神的健康をより向上させる上でも重要であり、心理臨床においてのみならず、私たちが自分の身体を使えるものにするための土台を構築した研究として大きく評価できる。とはいえ、今回山田氏によって提示された研究方法はまだまだ難しく容易ではない。アプローチの方法を整備すると同時に、誰でもがとりくめるものに改善しつつ教育やトレーニングに用いることができるようにしてゆくこと、および研究成果を積み重ねることにより説得力を高め、身体を通した共感というものをより人々に身近なものにするという課題が今後に残されている。また身体の動きを動かないこと、待つことなどをも含めた広いバリエーションでとらえるのか、どこまで概念として広げてゆくのか、といった点は今回あまりふれられていない。それらを含めて考えることが有用であろう。しかしこれらは本論文の内容が今後さらに発展し得る大きな可能性を内包しているが故の指摘であり、本論文の価値を減じるものではない。以上のことから本論文が博士（臨床心理学）の学位に値するきわめて優れたものであると、審査者全員一致で判断した。

論文審査主査 田中千穂子 教授  
伊藤研一 教授  
崎山ゆかり 特別非常勤講師  
(武庫川女子大学短期大学部幼児教育学科 准教授)